

Ⅱ 実 践

＜実践例 1＞ 第1学年 平成31年2月

(多 田 渉)

1. 主題名 「生まれてくる命に対する責任」 【内容項目 D—(19) 生命の尊さ】

2. 資料名 ドラマ「コウノドリ 第5話 14歳の妊娠 少女が母になる時」

3. 指導にあたって

(1) 生徒について

本学級の生徒たちは、これまでの道德の授業の中でさまざまな資料に触れ、複数の道德的価値がぶつかる状況下で自分の考えと他者の考えを出し合うなど、判断の仕方や解決の方法を考えてきた。しかし、社会的な一般論として考えられるような結論にいきつくことが多く見られ、理由も人間のあるべき姿や望ましい姿を基に考えたものになっている。つまり、授業の中で思考したことはその場で完結し、様々な立場や状況を踏まえた上で、その判断や解決策が最適なものであるか考えるところまでには至っていない。課題を自分事として捉え、出した結論について本当にそれでよいのかと多角的に考える経験が必要であると考えます。

生徒たちは、学校生活において安全面・健康面で自己の命が最優先であるという話を聞いたり指導を受けたりしており、一般論として命は尊いものであるという概念を持っているが、現状として命を軽視しているような言動がみられる場合もある。それは、命の尊さを日常生活の中で強く実感できるような経験をしている生徒が少なく、命について、真剣に向き合う機会が非常に乏しいからだと考えます。

今後、多くの生徒は命を与える立場を経験することとなり、人間の命の連続性を担う一員となる。命について与えられた立場からの視点ではなく、命をつなぐようになった時の立場からの視点を持たせ、一つの命に責任を持って対峙しようとしていく心情を養ってきたい。

(2) 主題に対する教師の考えとねらいとする価値について

本資料は、内容項目D—(19)「生命の尊さについて、その連続性や有限性なども含めて理解し、かけがえのない生命を尊重すること」に重点を置いた指導をする。特に新学習指導要領の解説にある「生命倫理に関わる現代的な課題を取り上げ、話し合い、多様な考えを交流することにより、生命とは何か、その尊さを守るためにはどのように考えていったらよいかなど、生命尊重への学びをより深めること」を主なねらいとする。本題材における「生命尊重への学び」は、生まれてきた子が幸せな人生を送ったり自立したりできるようになるまでの長期的な視野を持ったものであると考える。生命の誕生という事象で完結するのではなく、生まれてから先のことを考えるという現実的な要素を取り入れていくことで、生まれてくる命に対する責任と何かを考えようとする道德的心情を養うことになると考え、この主題を設定した。

(3) 資料のあらすじ

ドラマ「コウノドリ」は、乳児院や児童養護施設で幼少期を過ごした産婦人科医を主人公とするドラマである。

本資料は14歳の女子生徒がバスケットボールの練習中に倒れたことで妊娠が発覚する場面から始まる。妊娠の週数はすでに中絶することができない段階となっている。

話の中では、生まれてくる子どもをどのように育てるか、いくつかの選択肢が出てくる。出産した生徒が自分で育てる、生徒の親が育てる、乳児院や児童養護施設に預ける、特別養子縁組を希望する夫婦のもとへ養子に出すというものである。女子生徒は、どのような選択をするのが生まれてくる子どもの幸せにつながるのかを考え、結論を出す。それは養子に出すというものであったが、出産直後、養子に出すと決めていたはずの子どもをなかなか手放すことができない。隣の部屋では養子を希望している夫婦が待っており、子どもが連れて行かれたとき、母親であった女子生徒は泣き崩れてしまう。

(4) 目指す生徒像に近付けるために

①本題材で目指す生徒像

本題材での授業における資質・能力を発揮している生徒の姿を以下のように考えている。

長期的な視野を持った上で、生まれてくる命に対する責任について考えようとする生徒

「特別の教科 道徳」では、3年間を通じて「道徳的価値について誠実に向き合い、物事を多面的・多角的に考えながら、人間としてのよりよい生き方・考え方を追究し続ける生徒」を育てたいと考えている。そのために本年次は、生徒が自然発生的に「それぞれの立場から考えたときに何が問題となっているのか」「下した判断の先には、どのようなことが起こることが想定されるか」などについて、自ら教材に立ち返ったり想像したりしながら再思考し、最善と思われる結論に向かわせていきたい。

本題材で向き合うのは、生徒の発達段階を考えれば、今まで考えたこともないような事象である。そのため「生まれてくる子どもの幸せ」という思考の軸を設けて、自分が決断した選択は子どもにどのような未来をもたらすのか、また、生まれてくる命に対して責任を取るとはどのようなことかを多角的に考えさせる。子どもの成長や長期的な視野を持つて思考させることで、生まれてくる子どもに関わる人々の数だけ視点が必要となってくる。近い将来、命をつなぐ存在となりうる生徒たちに生まれてきた命の尊さを守るための責任の在り方について多角的に考えさせることを意識しながら指導する。生まれてくる子どもという、自分以外の存在について、その未来にまで思いを馳せることで、生命尊重についての道徳的価値に迫れるようにしていきたい。

②手立て

本題材は、生徒たちが直面した経験がないような事象である。そのため、生徒が状況を理解し、課題へ向き合いやすくすると同時に、生徒の発達段階に即して、ねらいを達成するために、以下の点を手立てとする。

- ・状況や展開を把握しやすくするために、ドラマという映像資料を扱う。生まれてくる子どもを取り巻く環境に現実感を持たせるとともに、一つの命が生まれて、育っていくにあたり、多くの人間が関わっていることに気付かせる。
- ・論点を明確にしながら、生徒個々に思考や判断をさせられるように「子どもの幸せのために」という軸を設定し、責任の対象を明確にする。
- ・考えるための材料を持てるように、パワーポイントを活用し、専門用語を解説したり、ドラマ中の生徒が置かれた状況を的確に把握させたりする。

【資料分析図】

	内容	考え・心情	価値	発問の意図	主な発問
資料	生まれてくる子どもをどのように育てるか、出産した生徒が自分で育てる、生徒の親が育てる、乳児院や児童養護施設に預ける、特別養子縁組に出すという4つの選択肢が出てくる。	自分の中に宿った命を現実のものとして受け入れられない。	生命の尊さ	子どもの幸せのためという軸を持たせることで、責任を取るとことは、その場の判断だけではなく、子どもの未来まで想像しながら選択するものだと気付かせたい。	この生徒は、生まれてくる子どもの幸せのためにどのような選択をすればいいのでしょうか。
	主治医や母親と話す中で、子どもに対する愛情が湧く一方、養子に出すという結論を出す。	生まれてくる子どもの幸せのための選択をしよう。		第三者的な視点で生徒の結論について評価させることを通じて、生まれてくる命に対して責任を取るとはどのようなことを考えようとする心情を養いたい。	この生徒の決断は、生まれてくる命に対しての責任を取ったと言えるでしょうか。
	出産直後、子どもをなかなか手放すことができない。隣の部屋では養子を希望している夫婦が待っており、子どもが連れて行かれたとき、母親であった女子生徒は泣き崩れてしまう。	養子に出すと決断をしたものの我が子を見て決意が揺らぐ。			

4. 本時の学習

(1) 目 標

自分が命をつなぐことができる存在であるという視点を持ち、生まれてくる命に対して責任を取るということはどのようなことなのかを考えようとする道徳的な心情を養う。

(2) 展 開 (2時間扱い)

学習活動【学習形態】	◇発問 ◆中心発問 △指示・説明	○教師の手立て
1. 生まれてくる命に対する責任についての認識を持つ。 【全体 5 分】	△これから 14 歳の中学生が母親になるというドラマを観ます。 ◇生まれてくる命に対する責任とはなんだと思いますか？ ・ちゃんと育てる。 ・傷つけない。	○本時の学習の見通しが持てるように、これから視聴するドラマのあらすじを説明したり現在の立ち位置を自覚させたりする。
2. ドラマを視聴する。 【一斉 25 分】	△生まれてくる子どもが幸せになれる方法を考えながらドラマを観ましょう。	○生まれてくる子どもをどうするかを自分事として方法を考えられるように、女子生徒が出す結論がわかる直前で映像を止める。
3. 生まれてくる子どもをどうすればよいかを考える。 【グループ 10 分】	◇この生徒は、生まれてくる子どもの幸せのためにどのような選択をすればいいのでしょうか。 <予想される反応> ・養子に出す…中学生では子供を育てることができない。 ・自分で育てる…子どもが本当の親ではないと知ったらショックだと思う。 ・乳児院に預ける…親が育てられるようになったら引き取ればいい。	○考えるための材料を持てるように、パワーポイントを活用し、専門用語を解説したり、ドラマ中の生徒が置かれた状況を的確に把握させたりする。
4. ドラマの続きを視聴する。 【一斉 10 分】	△親となる生徒はどのような選択をするのか見てみましょう。	○制度的に解決すればよいという問題ではないことに気付かせるために、女子生徒の葛藤が描かれた場面を観せる。
5. 生徒の決断の是非を考える。 【グループ 20 分】	◆この生徒の決断は、生まれてくる命に対しての責任を取ったと言えるでしょうか。 <予想される反応> ・子どもの将来を考えて下した決断だと思うの	○生まれてくる命に対しての責任の負い方について具体的に考えられるように、必要に応じて補助発問をする。

6. 本時の学び振り返る 【個 10 分】	で取ったと言える。 ・自分では子どもに何も与えていないので責任は取っていない ・今後子どもに関わることができないが、環境を与えたので少しは取っている。 △この時間に特によく考えたことをまとめましょう。	・取ったと考える生徒に対して 「子どもの気持ちはどうだろう」 ・取っていないと考える生徒に対して 「今後可能な責任の取り方はあるのかな」 ○学びを自覚させられるよう、本時を通じて増えたり大切だと感じたりした視点を追記できるようなワークシートを準備する。
----------------------------------	--	--

(3) 評価とその方法

自分が命をつなぐことができる存在であるという視点を持ち、生まれてくる命に対して責任を取るということはどのようなことなのかを考えようとする道徳的な心情が養われているかを、活動3、5の様子や活動6の記述内容から評価する。

5. 授業を終えて

○生まれてくる子どもを幸せにする方法を考えるにあたって、ドラマの中で出てきた選択肢を基に考えさせた。選択肢があった事で生徒にとって発問に対し自分なりの考えを見出せている様子が見られた。また、グループ内で交流をしながら意見を構築させる事で自分本位の考え方から脱却し、多角的に思考を巡らせることができていた生徒が多く見られた。

産んだ本人が育てる・・・	血の繋がっていない赤の他人に生まれてすぐに渡されてしまうのは生まれてくる赤ちゃん的にも嫌かなと思う。
施設に預ける	・・・お母さんとお父さんが協力して育てられるぐらいに成長したら引き取ることもできる。本当の親と関係が切れてしまうよりはいいのでは。
特別養子縁組	・・・赤ちゃんのことを考えると愛情がしっかりもらえる大人に育てられた方が良いと思う。子どもに安定した生活を与えるならこの選択肢が良い。

○主発問において、自分の考えの度合いを数直線に記入することで、生徒自身の考えに深まりを持たせることができた。その中で、責任を取ることと子供の幸せを考えての行動は違うということまで思考が及ぶ生徒も出てきた。

- ・今日の授業で、命って重いなと思いました。赤ちゃんのためにできることを考えるのが本当に難しく、それは、命が重いからかなと思いました。
- ・自分の都合でどうにかしていいものではない。「育てられなかったから養子に出す」ということは「自分の今の状況的に不可能だから養子に出す」ということだと思う。育てられる環境をつくるのではなく、赤ちゃんを育てないという選択をしたということだから無責任だと思った。将来は生まれてくる命に親としての責任を持ちたい。
- ・本当に難しい話だと思う。子どもの幸せが責任なら責任をとっている行動というのはどれも無い気もしてくる。
- ・何を責任と思って考えるかで責任を取れた・取れなかったは変わると思う。でもドラマでも言っていたように全員が生まれてきた赤ちゃんが幸せになってほしいと考えている。その状況で最善と言える赤ちゃんを幸せにするという選択をすることが大切だと思った。

▲様々な意見が出てきていただけに、仲間の考えを聞いて、自分の考えが変わったり自分の考えがより強くなったりしたことについて、変容を発表する場面があってもよかった。

▲目標の「命に対しての責任を取ること考える心情を養う」に則した振り返りが多く見られたものの、中学生の行動そのものを疑問視した振り返り内容も見られた。目標に近くため手立てを再考していく必要がある。

